慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リストとレイモンド
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.9 (1927. 9) ,p.1222(112)- 1263(153)
JaLC DOI	10.14991/001.19270901-0112
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270901-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リストとレイモンド

山田正夫

此の一文は嚮に發表した「リストの經濟思想の背景」の内に省略して置いた第六節を形成すべき部分である。從つて、本稿のみで一の完結した論文の體裁は具はつてゐるが、前稿をも併せ閲讀を賜れば幸甚である。

前稿に於いて特に此の一節を省略した最も主要なる理由は Raymond の原著が稀書であつて、容易に之に接する能はざりしに存する。幸にも増井教授がその初版を所藏せられ、久しきに亘る雅者の借覽に快諾を與へられた。故に此の研究の全きを得たるは一に同教授の賜である。

一

Daniel Raymond の名は可成り古くから經濟學者の中に列せられてゐた樣ではあるが(一)、彼の學説が經濟學史上に稍顯著なる注目を惹くに至つたのは、一八九九年に於ける Rambaud の著 Histoire des doctrines économiques. の中の記述を以て嚆矢とすべきであらう。併し Rambaud が Raymond に就いて敷言を費してゐる動機とも云ふべきは、彼自身 Raymond の著を讀んで思ひ立つたといふよりは、寧ろ彼の著述に先立つ二年前、一八九七年に John Hopkins University Studies の一篇として公にせられた C. P. Neil の Daniel Raymond, An Early Chapter in the History of Economic Theory in the United States. なる論著に依つて敎へられたと稱すべきであつて、今日の學史家をして Raymond を語らしむるに至つた功績は、結局 Neil の七十頁に足らぬ小著に歸せしめても大なる誤ではあるまいと思はれる。而も此の小冊子の現れて以來、Raymond に關する研究は殆ど全く爲されざるにも均しく、近年增訂せられた Pargrave's Dictionary of Pol. Econ. の中にさへ彼の姓名を發見することが出來ない樣な譯であるから、Raymond の一身上の消息に就いて吾人の知り得る所は、依然として Neil の傳ふる以上に出づる能はざるを遺憾とせねばならぬ。

Daniel Raymond は Connecticut の人で、一七八六年に生れ、一八四九年に歿してゐる。始め彼は辯護士たらんと志して Connecticut 州 Litchfield に於ける Tapping Reeve の法律學校に入學したが、その目的を果して一八一四年に彼は Baltimore に於いて辯護士の一員に加はることが出來た。彼は生地 New England 地方に於ける特殊の制度に對して不滿の念を懷いて居たが、生地を離れた後も猶ほ之を忘れず、一八一九年 Missouri 問題に關するパンフレットを公にして其の主張を世に問ふたことがあつた。

Raymond の經濟論として知られてゐる彼の著書は一八二〇年に初版を上梓した Thoughts on Political Economy. 一卷四百七十頁の書籍であるが、此の著述の成れる由來を知るには、彼自身の興味ある所言を顧るだけで十分であらう。曰く、『本書は余自身の樂しみに書き記したものである。余が之を執筆した主なる事情は職務に存した。社會は余に余の職業上の仕事を間斷なく與へて呉れるだけのことが不可能であつた。さもなければ余は決して此の著述を書き上げることは出來なかつたであらう。余は既に多くの陳腐なる法律書を閲讀して、遂に之に倦怠し切つてゐた。無爲閑散に時日

を過すの退屈なる餘り、余は政治經濟に關する愚考の一端を紙片に書き下して鬱散のよすがとしたのである。從つて之を以て一卷の著述をなすに十分の理由とすることが出來るならば、それで結構である。よし又之が理由にならないからと云つて、余は如何することも出來ない。余には他に何等述べ立てる程の理由とてないのである。』(二)『本書の執筆に着手した當時、余は簡單なパンフレット以上のものを書くつもりは更に有しなかつたし、此のパンフレットにしても、出版しようなどとは全く思ひも寄らぬことであつた。既に前にも述べた通り、余は自分自身の慰みのために執筆したのであつて、公にするために執筆したのではない。所が筆の進むに從つて問題は益〻興味を加へ、新しい見解や思想が自づと顯れて來たので、筆を衝き進めて遂に一卷の書籍を生むに至つたのである。』(三)『之を出版する最善の理由として余の辯明し得ることは、そが余に滿悅を與へたといふにある。人は他人と相談せず、自分の欲する儘の振舞をするといふことに一種の滿足を感ずるものである。』(四)と。

併しながら Raymond は本書の執筆に際して時間と材料とに力の及ぶ限りを盡したから、其の成果に就いて不完全の箇所を留めたる辯解を行ふ必要を感じなかつた。而も亞米利加に於いては、たとひ Hamilton の如く政治經濟上の特殊の問題に關する論攻を行ふ者はあつたにしても、未だ一箇の繼つた政治經濟一般論は何人に依つても企てられたことはなかつたのであるから、彼の著述は亞米利加の生んだ最初の政治經濟論と稱すべく、而して彼が『本書に對して要求することの出來る功績の悉くは、政府の本質が相違してゐる爲に全然我が國に適用されうることの不可能な外國の權威の束縛から、換言すれば、外國に於ける政治經濟の理論及び政策論から、脱却せんが爲に微力を傾けたことに歸するのである』。(五)

斯くて Raymond は當時米國に於いて廣く信奉せられてゐた個人主義に反駁を加へ、自由放任の政策を卻け、Adam Smith の所論に對して激烈なる攻擊を浴せ掛け、之に代ふるに米國の實狀に即した新學說を提唱せんとしたのであつて、從つて彼の著書の公刊せらるゝや、時將に保護貿易論の叫び漸く熾烈の度を加へんとしつゝあつたことゝて、之に對する世評は毀譽褒貶相半するといふ有樣であつた。併しながら之等の世評は何れも皆當代に於ける自由對保護の政爭の渦中から生じたものであつて、自由主義者の極端な痛罵を受けた半面には、また保護主義者の熱狂的歡迎も與へられたけれども、之を以て直ちに彼の見解に對する不偏正鵠の判斷と考へることは出來ないのである。(六)

斯くの如く、善惡何れにせよ彼の著書に對する世評は相當高かつたにも係らず、それは一般讀者の人氣を博することが出來ず、一版七百五十部を發賣しながら、その三分の一は競賣に掛けねばならぬ樣な有樣であつたが、『併し我國に於ける最も經驗あり叡智ある人士の幾人かゞ、此の標本（第一版は只一個の標本に過ぎなかつた）に對して讃意を表せられ、且つそれを社會の協贊を獲ることが出來る樣に仕上げるのは困難ではないといふ示敎を寄せられた以上、著者は再び努力を傾けて本書の改訂を行ふべき理由の在ることを感じたのみならず、之を遂行すべき要求を受けたものであると考へ』(七)て、一八二三年第二版の刊行を敢てしたのであつた。この再版に於いては、彼の不愛想な論調が多少緩和せられ、Adam Smith に對する手ひどい攻擊が徹回せられてゐるほか、數章に書き

替へを行ひ、新に二三章を加へて彼の根本的見解とは重要な關係を有しない特殊の問題に論及してゐるけれども、其の基く所の根底に於いては第一版の中に陳べられてゐる主旨と些かの異る點もなかつたのであつた。そしてその一般に迎へられなかつたことも依然として初版の際と變らず、同じ時代に Say の Traité が英譯せられて忽ち二版を重ね、その數合せて二千七百五十部を賣り盡し、Smith の Wealth of Nations に對する需要は猶ほ凡そ二千部の複刻を促してゐたことを顧れば、第二版纔かに四百五十部にさへその販路の狹小且つ遲々たるに困しみつゝあつた Raymond は、正に內國產の政治經濟學を供給しようとして外國品の競爭の爲に壓倒せられてゐる企業家にも類すべきものであつた。(八)

斯くの如く Raymond の著述が成功を收めることの出來なかつた理由は、一は未だ一介無名の法律家が盛名ある大家の定說に逆ふには尙ほ時機の熟してゐなかつたといふことにも依るが、又一には彼の所論の態度にも災せられた爲である。といふのは、彼の研究方法の粗笨なると、觀念の混肴の頻繁なるとに加ふるに、當時の政爭の中心問題を悉く拉し來つて之に對する忌憚なき自說を吐露した結果、偶〻或る問題に關しては彼の主張に耳を藉さんとする者があつても、他の問題に至つては忽ち彼の爲に激烈な一蹴を蒙るといつた譯で、彼の所信の凡てと思ひを共にするの徒を得ることは甚だ困難であつたのである。例へば彼の奴隷反對論に耳を傾ける時代の先覺者も、彼の銀行並びに會社制度に對する駁論に接しては思はず顰蹙せざるを得なかつたであらうし、又南部の人士にして彼の奴隷論の一端に觸れたとすれば、たとひ他に如何程の名見卓說のあるにもせよ、彼に聽從することを潔よしとはしなかつたであらう。

爾後年を閱すること十三年 Raymond は時正に至れりと考へてか、一八三六年に其の著の第三版を上梓した。一八三六年といへば、政爭の核心は悉く經濟問題の上に移り、Jackson が大統領の榮冠を克ち得たると同時に、銀行券の發行に制限が設けられ、奴隷解放の機運は濃厚になり、保護貿易に復歸せんとする努力も亦隆になつた時であつたから、此の版に於いて Raymond が課稅の結果に關する論述を租稅論に附加しに以外。一字一句、句讀の末に至るまでも悉く第二版の儘を改めず、恐らく之と同一紙型を使用して印刷したものであらうと考へられるのも、決して理由の無いことではなかつた。そして此の第三版は相當の普及を見たらしく、一八四〇年には更に改訂第四版が刊行せらるゝに至つた。第二及び第三版の刊本は二冊に分たれてゐて、徒らに尨大な取扱ひ惡い本であつたのを、第四版に於ては再び纒めて手頃な一卷とし、在來の行論の反覆重疊した部分を思ひ切つて短縮してしまつたが、その修正の態度には彼が序文に於いて述べてゐる樣に、過ぎし二十年間の政治史こそ明かに自己の主張の裏書きをなしたものであるといふ自信が示されてゐるのである。(九)寔に彼の根本思想は前後四回の刊本を通じて何等の相違をも見せてゐない。然しながら斯くの如きは寧ろ、一八二〇年以來の Raymond が、經濟論者としてよりは却つて法律家としての價値に依つて世人に認められ、その職務に忙はしくして經濟上の考察を安閑として同らすだけの餘暇を與へられなかつたからであつて、第四版の刊行に當つて彼は漸く、一八二四年に Beasley (十) の書翰に依つて暗示を受けた憲法に關する評論を、凡そ三十頁に亘つて新に書き足す餘裕を有することが出來た

ことを、その序文の内に記してゐるのである。二十個年の歳月は一個人の思想を變化せしめずに、一國民の思想を變化せしめたのであつた。Raymond は科學者としての資格こそ十分に有しては居なかつたが、豫言者としての資格は確かにそれよりは一層多く具へてゐたと云ふことが出來よう。

（一）Cossa, L: An Introduction to the Study of Pol. Econ. London. 1893. P. 465. Dunbar, C. F: Economic Science in America, 1776-1876. North American Review. January. 1876.

猶ほ Rambaud は『吾人は Raymond の姓名を Ingram の中にも、Espinas の中にも Léon Say 及び Chailley-Bert の Dictionnaire d'économie politique にも M. Block の Progrès de la science économique. にも見出すことは出來ない。』と記してゐる。(Histoire des doctrines économiques, Paris. 1899. p. 246. n.)

（二）Thoughts on Pol. Econ. In two parts. By Daniel Raymond, Consellor at Law. Baltimore 1820. Preface p. I.

（三）Op. cit. p. 469.

（四）Op. cit. Preface. p. II.

（五）Op. cit. Preface. p. V-VI.

（六）當時の新聞雜誌並びに知名の士の Raymond の新刊に對する評論に就いては Neil が稍詳かに紹介してゐる。Neil: Op. cit. p. 16-21.

（七）Raymond: Op. cit. Preface to the 2nd. Ed. cited by Neil: op. cit. p. 21.

（八）第二版の世評に關しては Neil. op. cit. p. 22 & p. 24. 參照。

（九）第四版に於ける非常な短縮の中に在つて、奴隷論の章と第三版で增訂せられた關稅論の章とは以前の儘收容せられ、銀行と貨幣とに關する章は夫々一節を加へ、會社に關する一章は全然新に書き直されて、以前の猛烈な反對論が甚だしく緩和せらるゝに至つた。

（十）Frederick Beasley は Pennsylvania 大學の學長であつた。彼の Raymond に寄せた書翰は第四版の序文に載せられてゐる。

二

Neil の著 Daniel Raymond, etc. の第四章は DANIEL RAYMOND AND FRIEDRICH LIST. と題せられ、その占めてゐる頁數は凡そ全體の三分の一に及んでゐる上に Raymond を紹介してゐる部分に比較して所論に一段の緊張が顯はれてゐるのであつて、彼の研究の眼目は結局 Raymond と List との交渉を闡明せんとするに在つたものと考へることが出來る。そこで彼の所信に從へば、『啻に List の體系の萠芽が Raymond に窺はれるばかりでなく、それが彼の八百頁に餘る著書(一)を通じて非常に著しく展開せられてゐるのを散見することが出來る』。(二)のであつて、彼は兩者の重要な類似點に關して左の如き對照を試みてゐるのである。(三)

第一　Adam Smith 並びに其の學徒は、私經濟と公經濟とを區別せず、從つて政治經濟乃至國民經濟を論ぜずに個人の經濟を取扱つてゐるに過ぎない。

リスト

政治經濟を構成する部門は、個人經濟、國民經濟及び人類の經濟である。(Let. I.)

レイモンド

國民の富は個人の富とは異れるものであるから、從つて政治經濟も私經濟とは異つたものである。(p. 406.)

吾人は國民そのものに關する明瞭な觀念を銘記して、之と此の國民を形成する個人の全

第二　正統學派は一國民の利益と人類の利益とを區別せず、從つてその說く所は甚だしく世界的に過ぎ、現代の實狀に適用することの不可能なものである。

全世界が若し恰かも北亞米利加の二十四州の如くに結合されて一の聯盟を形成してゐるものとすれば、自由貿易は現に合衆國內に行はれつゝあると同樣に、全く自然に且つ有利に行はれるであらう。……併しそれは世界の現狀ではないのである。(Let. I.)

世界的施設は　未だ之を實施する機が熟して居らない。(Let. II.)

第三　個人の目前の利益と社會の目前の利益とは往々にして相反することがある。又個人の一時的利益が社會の永久的利益と相調和する樣な場合は滅多にあるものではない。

私經濟に關する智識は亦直ちに國民經濟上の智識たるを得るであらうか。國民乃至國家の性質に關係のある夫來幾世紀に考慮を廻らすことは、果して個人の本性に具はつてゐることであらうか。……自己の欲する儘に放置せられた個人は皆、唯自分自身の欲求だけしか念頭に置かず、精々彼に取つて一番親密な關係のある後繼者等の爲を計る位に止まつてゐるが、結合して一個の社會を形成してゐる多數の個人は、悉く最も遼遠な時代の便益と欲求とに備ふることを怠らない。此の目的の爲には、彼等は現在の困苦と犧牲とを敢て辭さうとはしないのであつて、かくの如きは如何なる理性ある人でも個人から期待することは出來ないのである。(p. 165)

又個人は、單に自己の利益を最もよく理解し、且つ又自己の意の儘に任された場合に之を增進せんと努力を傾けることに依つて、常に社會の利益を增進するものでもない。(p. 166)

「第四　眞の政治經濟學は個々の國民が存在する事實を無視することは出來ない。各國民は組織的統一體であつて、國民の利益は個人の利益並びに人類全體の利益とは全然別個のものである。

體、若くは一部とを混同してはならない。(p. 34.)

現在の樣な世界の形勢の下では、政治經濟學者が、一國民の他の諸國民に對する政策は如何なる程度まで普遍的博愛主義に依つて支配せらるべきであるかといふ樣な問題に就いて議論を闘はすことは、全然妄想に過ぎない。現在に於いては政府の任務は決してその市民に保護を加へ、その國富を增進する以上に及ぶものではない。(p. 166. V. II.)

公益と私益とは屢〻明かに矛盾を示す。(p. 220)

私人は唯自己一身に對して賢明であるといふことだけしか期待出來ない。公の利益を求めることは決して彼等の義務ではない。彼等は國富の保管者ではないのである。斯くの如きは立法の部門に屬する事柄である。……何人と雖、現在の利益を享樂することが何等の背德とならない限り、之が子孫に對して弊害を及ぼすからといつて、自ら進んで放棄してしまふ樣なことがあらうとは考へられない。或は子孫のない者もあらうし、よし子孫を持つてゐるにした所が、二三代も隔つた子孫の利益に至つては、餘り疏遠であつて到底彼の行爲に影響を及ぼすとは不可能である。……

併しながら立法者がかゝる狹い、向ふの見えない見解を懷いてゐることは許さる可きではない。……自利の法則に就いて見ても、將來の利益が遙か遠いといふことは、其の利益が莫大に達するといふことに依つて對衡せしめらるべきである。(p. 222.)

…國民の統一は國民の永續的繁榮に對する根本條件である。

而して個人の利益が國民の利益に從屬せしめられ、幾時代も繼續して同一の目的を達成せんが爲に努力を致した處に於いてのみ、國民は生產力を調和を保つて發達せしめることが出來るのである。(163)

一國民は多數の個人より成る特別の社會である。

之等多數の個人は、共同の政府、法律、權利、制度、利害、共同の歷史と榮譽、權利、並びに生活に對する共同の防衛と保安を有して自由獨立の一團體を形成してゐるのであつて、

此の團體は他の獨立團體に對しては、只自己の利益の命ずる所に從つて働くに止まり、內には最大の共同の福利を增進し、外には最大の安全を樹立するが爲には、之を形成する各個人の利益を拘束すべき權利を具へてゐる。(Let. II.)

第五　從つて茲に個人經濟及び世界經濟に對して、諸國民の存立する事實に立脚した國民經濟なるものを認むべきである。

故に又各國民は銘々特有の政治經濟學を有するのであつて、國民をして最高の繁榮と優勢とを致さしむる方法を示敎することは、正に斯學の範圍に屬するのである。

…國民經濟なる概念は國民といふ概念に伴つて生じて來るものである。(Let. II.)

國民經濟學は、特殊の狀態の下に在る或る一個の國民が、或は外國の拘束と勢力とを阻止し、或は國內の生產力を增進せんが爲には如何なる手段方法を講じて個人の經濟を指導制御し、人類の經濟を統制すべきであるかを敎へるものである。(Let. I.)

政治經濟學の內には、經濟と等しく政治も包含せられてゐなければならない。(Let. II.)

一國民は單一不可分のものである。故に政治經濟の眞の體系は此の觀念をその根本原則として建設せられねばならない。(p. 44.)

…凡そ賢明なる立法者としての眞の政策は、國民を以て不滅不朽と思惟し、そが永劫に存立するものとして立法の事に當るに存する。(p. 224.)

一國民は、幾百萬の人間に依つて構成せられてゐる人爲的存在、即ち合法的實在である。

一國民は一の統一體であつて、統一體としてのあらゆる特性を持つてゐる。それは權利の統一、利益の統一、所有の統一を持つてゐる。(p. 35.)

あらゆる國民は、他國民の利益に就いては何等顧慮するを要せず、專ら自己の利益のみを考慮すべきである。(p. 166. V. II.)

一國民の內國政策は…一般の善といふ見解に從つて考案せらるべきである。多數者の幸福は決して少數者の幸福のために犧牲とせられてはならない。(p. 166. V. II.)

外國の政治經濟學の理論並びに政策體系は政府の本質が違つて居る爲に、我が國には全然適用出來ない。(p. 5. 1st. ed.)

政治經濟學は社會の富、換言すれば國富の本質を敎へる學問である。…それは一國の富と幸福とを增進するに最も有効な方法を敎ふるものであつて、苟くも之等を促進する樣なものならば悉く包含してゐる。(p. 9.)

政治上の施設の作用を確かめ、その缺陷あることを發見した場合には、適當なる改善策を示摘することは、政治經濟論者の任務である。彼の直接の目的は、如何に立法すべきや

第六　國富は交換せらる可き貨物より成るものではなく、生産力より成る。故に國民經濟學は正統學派の如く交換價値を重視すべきに非ずして、生産力の發達の研究に專らなるべきである。

Adam Smith の所論は價値の理論に外ならない。換言すれば單なる一小店主乃至一實業家の理論であつて、一國民の生産力が、その國民の文明、幸福、勢力、存續、獨立等の利益の爲に、如何にして喚起せられ、增進せられ、維持せられ、保護せらるゝかを示摘する學問上の理論ではない。（p. 350）

…殆ど總ての論者は、價値が公共の富並びに私人の富の尺度であると考へて、價値の主體やその動搖の原因等を研究してゐる。（p. 181.）

實業家が變じて政治家となる場合には、彼等が商賣上の用語などを使用するのは無理のないことである。…併し斯かる用語の誤用に謬まられ、若くは自ら之を誤用するが如きことは、苟くも政治學者たるものゝなすべき業ではない。（p. 296.）

「價値」なる語は公共の富に對しては全然適用せられない。（p. 56）

…若し一國民が、その人口に比例して生活必需品及び享樂品を獲得する能力を他國よりも多分に有するならば、その國民は一層大なる國富を所有してゐることになる。（p. 48）

國民の繁榮は Say が信じて居る樣に、富（即ち交換價値）を蓄積することが多ければ多い程、それに比例して益〻大となるのではなくて、生産力を增進する割合に應じて增加するのである。（p. 144）

Neil に從へば、以上の如き根底に基いて List も Raymond も共に、生産的及び不生産的勞働に關する Smith の分類を斥け、國際的分業及び自由貿易を是とする彼の所說に反對して、各國民が銘〻農工の發達の調和を計り、自由放任の策を廢して政府の干涉を行ふべきことを主張したのであると云ふ。

（一）Neil は茲では第二版を指してゐる。既述の通り第二版と第三版は上下二卷より成る彩大な書籍であつたが、第一版四百七十頁に比較してかくも著しい頁數の相異を示してゐるのは、增訂した部分が多いためばかりではなく、非常に大きな活字を使用した爲であつた。又此の第二版の書名は Elements of Political Economy. と改められた。

（二）Neil: op. cit. p. 46.

（三）Neil が比較してゐる兩者の所言の悉くを茲に掲げることは出來ないし、彼の手際は適切といふよりは寧ろ冗漫に亙る嫌があるから、私は要點のみを抄出して置くに止める。引用文の頁付は、List の方では公開狀と、彼の主著の英譯 The National System of Political Economy. Lloyd's translation. London, 1885. とに依り Raymond に就いては一箇所注意しておいた部分を除いて悉く第二版に從ふものであつて、總て Neil の記してゐる儘を改めないことにした。此の一節を記述はすべて Neil: op. cit p. 47-57. に從ふ。

三

以上の如く List と Raymond との所論を對比して見た結果 Neil は如何なる結論に到達したか。成る程 List 自身の言ふ樣に、彼は米國の實狀に大なる敎訓を受けたであらうし、又勿論同一現象に關する研究から、同一結論の導き出されることも、有り得べからざることではない。（一）のみならず凡そ二十年の久しきに亘つて政治經濟問題の研究に從事してゐた List の所論に較べて、一法律

家が自己の職業の餘暇に任せて書き綴つた私見に過ぎない Raymond の著書に、論理上の精緻を求めることの出來ないのは當然である。(二)『然しながら茲に摘出した一致點の數々は Raymond が少くとも List の體系の特質に先鞭を着けたといふ主張を維持するに十分である。而も List は暗默の裡に Raymond を借用せる者であつて、斯く推察しても決して速斷の責を蒙るものではないといふことの出來る有力な暗示を與へる事情が他にも存するのである。』(三)

かくて Neil は List が Raymond に啓發せられたと思惟すべき有力なる理由を凡そ二個の點に發見する。

第一に、List が正統學派に反對した論說は、彼が亞米利加に於いて公にした Outlines of American Political Economy. 以前には全く見出すことが出來ず、加ふるにその所論は彼が在來懷いて居つた所から展開して來たと云ふよりは、その總てと全然背戻してゐるのを見る。(四) 此の點に關する Neil の論證は、當時資料の不完全であつた爲に十分ではないが、其の大要を略述すれば、Häusser の篇纂した Friedrich List's gesammelte Schriften. に收錄せられてゐる渡米以前の論文五篇には、就れも猶ほ Adam Smith の自由貿易論に對する信賴が稀薄になつてゐない上に、彼の手にする能はざる獨逸新聞に公表した諸論策の內にも未だ新學說の萠芽の顯れてゐないことは、之に迪曉せる學者の認むる通りである。例へば Leser に從へば、一八一九年に於いて List は報復關稅を認めたのを唯一の例外とする他は、Adam Smith の自由貿易論に支配せられて居て、國內產業が保護關稅に依つて喚起せらるゝと信ずるが如きは異端であると考へてゐたし、一八二〇年に於てさへ、未だ彼は保護關稅が一國の產業上の精力を本來その適せざる方面に向はしめ、かくて產業の發達を阻止するに至るべきことを主張してゐるのである。のみならず List が世界經濟と政治經濟との區別に想到し、生產力の理論を交換價値の學說に對立せしめるに至つた時すら、Leser は List を以て猶ほ Adam Smith の忠實なる學徒に止まるものとなし、彼が世界的自由貿易の原則を棄てざりしことを示摘してゐる。兎に角 Leser は List 渡米後二年にして公にした Outlines の內に始めて Smith の學派に對する反對の態度を發見するのであつて、斯くの如き見解の變化を彼は List の新しい環境に歸せしめ、List は當時社會一般に漠然と論せられてゐたものに、學問上の型態を與へたに過ぎないと稱してゐる。(五) 更に Eheberg の論證に依つても亦、List は米國の實狀に接して始めて Smith に反對するに至つたことが證明せられてゐる。(六) して見れば List は Raymond とその立論の根據を同じくし、彼がその觀念を得たのは實に米國滯在中であつて、而も Raymond の著述が刊行せられてから數年の後であつたことが明かになる。

果して然らば第二の點に進んで、List が Raymond の著書を知つてゐたと信ずべき理由が在るかといふに、此の點に關しては直接の證跡はないけれども、猶ほ周圍の事情より推してかく推察することは不可能なことでないばかりでなく、寧ろ List が彼を知らなかつたと斷ずる方が困難なくらゐである。何となれば Raymond の著は、決して廣く一般に歡迎せられなかつたとはいへ、正統學派に反對した考を懷いて居つた人士の間には、大なる印象を與へ非常な賞讃を博し、かくの如き讃美の聲は往々にして過大に失するとさへ思はれる位であつた。故に List が保護運動に投じた當時、彼

の周圍にありし人士に依り、新聞の評論に依り、Raymond の盛名に接する機會の乏しくなかつたことは勿論、(七) Pennsylvania Society の會長 M. Carey の如き彼の經濟論を以て Smith, Say の大著を遙かに凌駕するものとなし、實現はせられなかつたが年額五百弗を提供して Raymond を Maryland 大學の教授に任じてその經濟學說を講義せしめようと計畫したことさへあつたのである。(八)

以上の樣に考へて見ると、『Raymond と List は、各〻政治經濟學の根本として同一の原理を包懷して居つた。Raymond がその原理を公にしたのは List が同樣な觀念を懷いてゐるといふ證跡を示したのより數年以前のことに屬する。List は親しく Raymond の著書に接する機會を有した後に、彼の體系を發表したに過ぎない。彼が全く此の著に關する智識を持つてゐなかつたと信ずることは困難である、』(九)といふことが出來る。Neil が最後に下した結論は斯くの如くである。

Rambaud は List と Hamilton との關係を認めると同時に、List と Raymond との交渉は一層密接確實であつたと稱し、(十) Raymond の所論の特色四點を擧げて、その何れもが等しく List の學說の根底となつてゐることを示摘してゐる。(十一) 彼の考證は專ら Raymond の著の第四版に依つて居るが、之は恐らく初版乃至第二版に接することが困難であつた爲であらうけれども勿論その爲に研究上に不都合の生じる樣なことはないのであつて、その考證の結果は Neil の所述と大差あるものではない。即ち Rambaud が List と Raymond に共通の根本概念となす所は、(一)國民の富と私人の富との區別、(二)國民の具有する經濟的統一體の性質、(三)政治經濟と私人經濟との區別、(四)生產的勞働と不生產的勞働との區別、の諸點に存するのであつて、Rambaud は猶ほ List の經濟思想を紹介する傍ら屢〻之を Raymond に比較しては居るが、(十二) 何れも Neil の既に示摘してゐることであつて、一々茲に記さなければならない程の特異の見解は見られないのである。

Lepelltier の雜誌論文 Un Precurseur de List: Daniel Raymo.id (十三) は、僅〻十五頁の內に上に擧げた Neil の著述の要點を簡潔に紹介してゐるに過ぎず、彼自身の見解とも覺しきものは遂に一行も發見することが出來ないのであつて、結局彼の業績は米國學徒の勞作を佛蘭西語で傳へてゐるといふに止まる。

List と Hamilton との交渉に就いては熱心な考證を試みてゐる Hirst も、List と Raymond との關係に至つては甚だ冷淡に過してゐる。即ち女史も亦 Neil の結論を借用するのみに安んじてゐるのであつて、自ら進んで Raymond の著書を跋涉しようとは試みなかつたのである。(十四)

斯くの如き諸說は、孰れも List と Raymond との類似を指摘してゐるのであるが、それでは此の兩者の關係を如何なる程度まで認定すべきかといふ問題に對しては、決して明確な回答が與へられてゐるものとは思はれない。此の點に關して更に有力な見解を持する者として、List の思想の發達に關する詳細なる考證を遂げた Köhler を擧げることが出來るが、彼も猶ほ Neil の List と Raymond との所論の綿密な對照を其のまゝ自著の內に再錄してゐるとはいへ、Raymond に關する研究は親しくその著の第一版に基いて新にしてゐるのであつて、其の結果彼は Raymond を以て明かに List の先蹤と斷ずべき理由を兩者の所論の中より摘出し得たりと稱して List が Raymond の著を讀んだか讀まぬかといふ樣なことを確かめるために傳記上の詮鑿を行ふの無益なることを主張してゐる

のである。

少しく Köhler の所論に聽くに Raymond と List との根本思想と稱すべき點は、（一）Adam Smith の學徒に對して、個人經濟と國民經濟との區別を忘れ、個人の富と國民の富とを混同してゐるとの非難を浴せ、（二）個々の個人と國民との觀念を截然區別すべきことを主張すると同時に、（三）國民を以て一個の有機的、不可分の、永續的統一體であると考へたといふ三ヶ條に歸するのであつて、『Raymond が斯くの如き自己の主旨に基いて展開してゐるあらゆる推論を、後に至つて List は悉く襲用したるに外ならず、只種々の點に於いて List は Raymond を擯んずること一段にして』、之が暗示せる所を彼が一個の「學說」に形成せるの差あるのみである。殊に List の學說の特色をなす『所謂經濟上の國民性の原則なるものは、List 自身に依つては Raymond に於ける程明瞭確然と表明せられてゐない。寔に Dühring に依つて命名せられた「國民性原理」なるものは、Raymond に於いて、而も只 Raymond に於いてのみ、殆めて發見せられるのである。』斯くて國民を一の統一體と考へる觀念から、その永遠の獨立のために政府干涉の義務が肯定せられ國富增進のために生產力の重要が主張せられる。『かくの如き Raymond の思索過程を攻究せる者は、生產力說が Raymond に於いて始めて發展せしめられたる事實を認めざるを得ないであらう。』其の他 List が後年に至つて「發見」したと云はれてゐる各個の學說は、皆 Raymond に依つて既に表明せられたものに過ぎないのであつて Köhler は、『一と度國民の統一體に關する概念を把握するに至れば、この根本原則より生じて來るあらゆる斷案に到達するの困難ならざることを信ずるものである。』（十五）

而して又 List が Raymond を學んだと考ふべき有力なる理由の一は、彼が渡米以前に在つては未だ斯かる國民性の根本思想を持つてゐなかつたといふことである。此の主張に關する Köhler の論證は非常に詳細であつて、今茲に紹介し評論するの暇はないが、要するに彼が獨逸關稅同盟當時に懷いて居た思想は國民的政策の樹立にあつたとはいへ、經濟的若くは政治的統一體としての國民性の本質を未だ確保するに至つては居らなかつたと稱するのである。（十六）

斯く觀察し來るならば、List と Raymond とは共にその立論の根據を同じうするものであつて、List の新學說なるものは全く Raymond の著書に淵源を有するものであるといふことは、多言を要せずして認定せられるであらう、故に Köhler は兩者の交涉を肯定するに何等の外部的證跡をも必要とは考へないのであるが、周圍の事情より推察しても、決して List は全然 Raymond の所說を知らなかつたと主張すべき根據のないことを最後に附言してゐる。（十七）

（一）Neil: op. cit. p. 57.
（二）do. p. 46.
（三）do. p. 57.
（四）do. p. 57-62.
（五）Allgemeine Deutsche Biographie. p. 762, 3, 6.
（六）Conrad u. a: Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. VI. Art. List.
（七）例へば List が關稅問題を考察するに當つて參考とした Nile's Register は一八二〇年十二月十六日の紙上に Raymond の著を紹介して讃辭を與へてゐるし、然く奮號に遡るまでもなく、List が米國に到着してからでも Virginia 大學で

之を教科書として採用したといふ記事の掲載せられたことがあつた。(Neil: op. cit. p. 175 63.)

(八) 此の事實の詳細は Maryland 大學の記錄が火災の爲傳はつてゐないので知るに困難であるが、Carey: Biographical Sketches に收錄せられてゐる Carey と Raymond との間の數通の書翰に依つて大凡そ之を推察することが出來る。Carey が斯かる提議をしたのは一八二二年一月十二日の書翰に於いて見られるが、大學當事者は Raymond に好意を寄せず、一月十九日の書翰に於いて既に Carey は自己の目的の達せられざる以上出金すべき理由なきことを書き送つてゐる。此の書翰は Neil の上掲書に抄錄せられてゐるが、彼は Carey の提案の容れられざりしは恐らく Raymond の奴隷論が祟りをなした爲であらうと述べてゐる。(p. 18-21.)

(九) Neil: op. cit. p. 63.

(十) Rambaud: op. cit. p. 245, 246.

(十一) do. p. 247 ff.

(十二) do. p. 252-260.

(十三) Revue d'Economie Politique. Quatorzième Année. Paris. 1900. p. 841-855.

(十四) Hirst, M. E. Life of Fr. List. London. 1909. p. 112-3.

(十五) Köhler, C: Problematisches zu Fr. List. Leipzig. 1908. p. 119-122, 125-8.

(十六) do. Kapital I. p. 1-50, p. 122-3.

(十七) do. p. 128-139, 135-6.

四

茲に私は Raymond の Thoughts on Political Economy の要諦を紹介しながら、上記諸學者の見解の當否を檢討することにする。(一)

Raymond の經濟論は前後二部に分たれる。第一部は國富の本質及び原因を論ずる部分であり、第二部は國富增進の手段を窮め、更に進んでは在來諸國民が採用した最も優れたる手段を檢せんとするものである。(二)

『政治經濟とは公共の富、即ち國富の本質並びに原因を敎へる學問である。……それは一國民の富と幸福とを增進するに最も有効なる手段を敎ふるを以て任とし、從つて之等を增進する傾向のあるあらゆるものを包含する。』

抑〻天帝の命じ給ふ自然の大法に從へば、『人間は己が額に汗してパンを求むべき』なるにも係らず、古代中世の歷史を顧ればそは悉く掠奪の歷史に外ならず、實に社會契約の第一條項は『吾人は吾人の隣人を掠奪せん。』といふに在つて、『吾人は相互に掠奪することなかるべし。』とは之を有効に實現せんが爲に第二項として附加せられたのみであつた。されば征服と掠奪との容易なりし古代中世には、政治經濟に考慮を廻らす必要はなかつたのであつて、征服掠奪が自然の大法を侵して他人の勞働に依賴するのとは異り、政治經濟は自然の大法に則して自己の勞働に依つて國富を獲るの途を指示せんとするものである。(三) Raymond の經濟學說の根柢には常に必ず此の自然の法則に對する信念が存在したことを忘れてはならない。

凡そ政治經濟に關する議論を行はんとする以上、先づ第一に國富の何たるかを明瞭にして置かねばならぬが、在來の經濟論者の說を顧るに實に千差萬別、一として一致せるものあるを知らない有樣であつて、『此の問題に關する誤謬の大原因は實に國富と個人の富とを混同してゐることに存す

る。……寔に富なる名辭が國民に對しても個人に對しても何等の差別なしに適用せられてゐるといふのは、政治經濟學に取つては最も不幸なことと云はねばならない。』元來個人と國民とは確然區別せらるべきものであつて、國富の正確な觀念を得んと欲せば、先づ國民の正確な觀念から樹立して行かなければならないのである。

『國民は正しく無數の人間より成る一の人工的存在乃至法律的實體である。』『國民は一の統一體であつて、統一としてのあらゆる特性を具へてゐる。そは權利の統一を有し、利益の統一を有し、而して所有の統一を有するものである。』

一國民の利益と、此の國民を形成する個人の利益とは相一致する場合もあらうけれども、また往〻にして全く相背反する場合もある。同樣に個人の富裕なることは同時に其の國民の富裕なることを意味する場合もあるが、國民の富裕なる所以は必ずしも個人の富裕なる所以と相等しいとは限らない。

個人の富とは『財産の所有といふことであつて、その財産の使用に對して所有者が生活必要品並びに享樂品を獲得することの出來るもの』である。故に個人の富の場合には、人が勞働するかしないかといふ樣なことに關係なく、只生活必需品及び享樂品を齎らすだけの財産を所有すれば、之を稱して富となすことが出來るのであるが、斯かる觀念を直ちに國民に適用してその貧富を分つことが出來ないのは言ふまでもないことであつて、眞實の政治經濟體系が單一不可分の國民てふ觀念の上に築かるべき以上、僅かにその一部を構成する個人に就いて言ひ得ることを、決して統一體としての國民に當て嵌めてはならないのである。一國民は個人と同樣に、或は土地を貸し、貨幣其他の財貨の使用を他に與へて之に對する生活必需品及び享樂品を獲ることが出來ない。而も『此の巨大なる人工的存在は、無數の人間より成り、彼等に對しては實に「汝の額に汗してパンを得べし。」てふ宣言が下されてゐるのである。』茲に於いて國民の一部を構成するに過ぎない個人に就いて云ひ得ることは、一個の統一體をなす國民の上には適用出來ないと稱する Raymond の論法は、神聖なる自然の大法の下に巧妙に回避せられ、『あらゆる部分を支配する同一の法則は、亦全體をも支配せざる可らざるもの』とせられた。即ち『國民は自らの額に汗するに非ずんばパンを獲ること能はざるものである。』斯くて Raymond は國富の眞の定義を下して曰ふ、『生活必需品並びに享樂品を獲得するの能力之なり』。と、

故に Raymond に從へば、國民の貧富を定めるものは、その有する生活必需品並びに享樂品を獲得する能力の大小であるが、此の能力は勞働と離れて獨り存在するを得るものに非ざるのみならず、其の範圍は種〻雜多な事情に左右せられるのである。例へば政府の本質の之に影響を及ぼすことは、專斷暴虐の治下に於けるよりも自由の政府の下に於ける方が國民の活動を促すこと一層大なるを觀れば明かであらう。一國の氣候、沃度、住民に對する領土の割合、文明進歩の狀態、學藝技術發達の程度、貿易上の地位、等は何れも皆其の大小を支配するものであるが、就中此の能力は國民の習性の勤勉なるや否やに依存すること甚だ大なるものである『從つて勤勉の習慣は、國富の基本中に在つて最も重要なる項目を形成するのである。』

斯くの如き見解に基いて Raymond は在來の種々な國富の定義に對して評論を行つてゐるが、特に吾人の注目を惹くものは、Smith の、あらゆる個人の資本の總和、即ち國民の資本は、一個人に於けると同樣に、その收入の消費額の殘高を蓄積加增するに從つて增大するといふ所論に對する評言である。Raymond に從へば、Smith は此の場合資本と富とを同義に使用するの誤を犯してゐるものであるが、今しばらくかゝる用語上の適否を別として Smithe はまた只個人の富に就いて可能なる消費殘額の蓄積を國民の富に就いても等しく適用せんとするの妄を敢てしてゐる。何となれば、抑〻勤勞の產物は年〻消費せられ若くは消耗し去つて、長期に亘つて保存蓄積せらるゝことは殆ど無いからである。此の事實は二個の自然の法則に依つて起る 第一に生活必需品たる土地の產物は、性質上滅失に歸し去るものであつて、之即ち人間をして額に汗して食はしめんが爲の自然の規定である。第二に人口に關する自然の法則は、あらゆる時代あらゆる國家に於いて、生活資料の容す限りの人口を增殖せしめるが故に、生活必需品がよし滅失せずとするも之を多分に蓄積することは不可能である。のみならず斯かる自然の法則を俟つまでもなく、生產と消費とを一致せしめんとする一の精神的法則さへ存してゐる。農工上の滅失する生產物は元より、陶器、邸宅、金銀等の如き永續的貨物に至るまで、目前の消費のために需要せらるゝに非されば、決して生產せられることはない。されば常に需要が供給よりも大なるを以て可とすべく、生產餘剩額の蓄積はよし可能なるも國富に對しては弊害を齎すものである。

『勞働とは、生活必需品並びに享樂品の生產を目的とする人力の働きである。』從つて人間の努力が勞働なるや否やは、その努力の動機に依つて決し、その生ずる結果に依つて決するものではない。勞働が生產的なるや否やは、その結果に依つて決せられる。換言すればその勞働の結果、生活必需品若くは享樂品が獲られたるか否かに從つて決する。此の一事を解すれば、在來學者の間に喧爭を極めた生產不生產の問題は無益であるとなし、Raymond は Adam Smith 及び Quesnay の所論に對してその蒙を啓かんとするのである。

Smith に對する攻擊は更に價値論に於いて峻嚴となる。抑〻『價値とは、一物の代價若くは價ひを意味し、一物の他物に對する相對的代價を表はすものであつて、從つて一貨物を他の貨物と交換する場合にだけしか用ゐられない言葉である。』故に價値と交換價値とは全然同一のものである。然るにも係らず Smith は之を區別し、價値の標準を勞働に求めんとするのであるが、『價値の不變的標準の如きものは存在しない。』あらゆる物の價値は、吾〻の欲望、移氣等に依つて常に變動して止まざるものである。

以上の論述の後に Raymond は國富の源泉及び原因の考察に入る。此の場合注意すべきことは從前の經濟學者が源泉と原因の二語を混同して使用せる爲に議論の混亂を來してゐることであつて、國富、即ち生活必需品並びに享樂品の本源を表はす語と、之を生產する原因を表はす語とは明瞭に區別しなければならない。

土地（海洋を含む）が國富の唯一の源泉であつて、あらゆる生活必需品享樂品が皆土地より生じて來ることは云ふまでもなく明かである。然らば國富を生產する原因は何處にあるか。『土地は決して

自發的にその果實を生ずるものではない。大法は「人はその額に汗して食ふべし」といふにある。然らば勞働こそ國富の原因にして、且つ唯一の原因たるものである。即ち勞働は偉大なる泉より生活必需品並びに享樂品を汲み出すものである。』故に眞の政治經濟の根底は人間の勤勞である。國富を生産する力は人間の骨格と筋肉との外には何處にも求めることが出來ない。土地の産物を增加せしめんには唯勤勞に依賴するより外はないのである。

Raymondは茲に Wealth of Nations. 冒頭の二節を引用して來て Smith の云ふ「基本」なる語に代ふるに「原因」なる文字を以てし、「便宜品」を「享樂品」と置き替へるならば、彼は實に大經濟學者たるの雄名に恥ぢざる深遠なる學理を把握してゐたものであると云ふ。然しながら不幸にして Smith は終始此の出發點を固執せず、社會の資本は社會を形成する個人の資本の總和に均しく、從つて個人の資本を增加すると同一の方法に依つて增加するを得ると主張するに及んで、彼は資本と富とを混同するのみならず、國富は勞働　資本及び土地より生ずるとの謬見に陷つてゐるのである。而も之國富を個人の富と混同し、國民の統一に留意せざりし結果に外ならぬのである。

『Lauderdale　卿は國富と個人の富とを區別せんと試みた唯一の政治經濟論者であると自分は信ずる。』蓋に Raymond は自己の學說を樹立するに際して Lauderdale の經濟論に大なる暗示を受けたものゝ如く思はれるが、Lauderdale の所說と Raymond の所說との間には大いなる逕庭が存するものであつて、Raymond はよし研究の指針を彼に與へられたと考へることは出來ても、兩者の交涉は決して List と Raymond に於ける程濃厚に觀取するを得ないのである。(三)即ち Raymond は Lauderdale の所言を擧げて漠然不明瞭にして事の根底に立ち入らざる無用の區別に止まることを指摘してゐる。何となれば彼は國富と個人の富を別つべきことを認めながら、國民の統一に想到せず、國民と個人とを混同し、土地、勞働及び資本の三者を以て富の源泉なりと稱するが如き謬說に陷つてゐるのである。

斯くの如く國富の源泉と原因とを明かにし、其の定義を確立した上で問題になるのは、各種の勞働を比較して孰れが最も國富の增進に資するか、又かゝる勞働を奬勵することは果して政府の義務に屬するか、といふ點である。

『或る種の勞働、若くは他種の勞働の何れが、國富を生産すること最も大であるかは、全　偶然不定の事情に依る。』故に『二種の勞働の相對的重要を確定せんが爲に頭を惱ますことは無益である』從つて或る時代に於いて農業上の勞働が最も生産的なことがあつても、他の時代若くは他の國に於いては工業上の勞働が最も生産的であるかもしれない。唯精神上の性質に於いては農業勞働を以優れりとなす理由のない譯ではないが、そは決して生産上の有利不利に何等の關係を有するのでなく、又勿論工業勞働を看過して之のみを奬勵すべき理由などはないのである。

商業を以て生産的なりと稱する Mercantile System の誤謬も同樣の理由に依つて摘出せられる。農業と工業とは相互に他を利とし、兩者その中備を得たる國民は最も繁榮する。同樣に農業と商業とも等しく國富に貢獻し、その何れか一方を以て生産力を優れりとなすこと能はざるは勿論、農業なくんば商業上の何等の勞働も無用なるべく、商業存せざれば農業上の勞働も遂に十分の發展を見

ることは出來ないであらう。

猶ほ Raymond は政府が之等各種の勞働の平衡を得んが爲に保護奬勵の策を執るは正にその義務なりとし、而も國富は生産物の蓄積より成るに非ずといふ觀念から、勞働の全産額を自然の命ずる期間、乃ち生産の次年に於いて完全に消費せしむるの用意を怠らざるを以て、その重要な目的の一とする。從つて他國民の意志に支配せられる外國市場よりも、內國市場の方が國富に取つては有利であつて、政府は決して安價な場所で購入し、高價な場所で賣却するといふ樣な卑賤狹隘な個人的利益の原理に支配せらるべきではなく、宜しく高尙遠大なる公共の利益に基かねばならないのである。

Mercantile System の國富に對する觀念は、勿論富は貨弊の蓄積より成ると考へ、個人の富と國民の富とを區別しなかつたといふ點から攻擊せられるが、貿易平衡の說に至つては、國富とは何等相關する所なきのみならず Raymond は却つて斯かる見解は國富を破壞するものであると稱するのである。

又旣に述べた樣に勞働と稱すべきものは、生活必需品並びに享樂品を生産する人間の努力であつて、必需品並びに享樂品とは決して衣食住のみに限らず、人間に有用なものならば快樂幸福を感せしめるものに至るまでその悉くを包含すると考へる以上、勞働自體の性質上不生産的と呼ばるべきものはない譯である。勞働が不生産的なりといふは、その目的とする結果を達成する能はざる場合であり、從つて社會に對して全然無用なるか若くは有害なる場合である。例へば詩人が惡德を讃美し裁判官が誤れる判決を下すが如きは不生産的であるが、社會契約の第二の條項が敎ふる如く、吾人は相互に他人を奪取す可からざるが故に、遊食懶惰の徒たり、無用有害の事に携はるを許さる可きではなく、從つてかゝる不生産の勞働なからしめんとすることは亦政府の義務に屬するのである。

旣に述べた通り、生産物の蓄積が國富を增加するのではなくて、年々の生産額は出來る限り年々消費し盡して、その殘額の蓄積を阻むこそ眞に國富を增進すべき途であると云へば、或は人は濫費若くは奢侈を以て最も有効な國富增進の手段と考へるかも知れないが、抑〻經濟は美德にして奢侈は惡德なることに思を廻らせば、かゝる謬說に迷はされることはあるまい。Raymond は先づ之を個人の經濟に就いて論究せんとする。『私經濟とは、收入を最も大なる無害の快樂を齎らす樣に使用することである。』從つて收入を貯蓄し、その收入の齎らす快樂を可及的小ならしめんとするは無害の快樂を最も多く享けんとする方法ではない。それは貪慾である。富を致す手段として、或は貯蓄を擧げ、或は節約を擧ぐるは、皆之惡德を奬める危險な學說に外ならない。同時に奢侈濫費も亦この私經濟の原則によつて排除せられる。何となればその齎らす快樂は決して無害とは云はれないからである。故に私經濟上に於いては貪慾、節約も、奢侈濫費も共に之を斥けなければならない。而も國富增進の原則も亦『此の最も嚴肅なる私經濟の法則と完全に一致するのである』。

Thoughts on Political Economy. の第一部は以上を以て終る。(四) Raymond の經濟學說の根底はすべてこれ等の信念の中に存するのである。

(一) Raymond と List を比較する場合に Thoughts on Political Economy. の初版に依るべきか、第二版に依るべきかは

疑問である。年代から云へば勿論第二版の方を選むべきかも知れないが、Listが閲覽したのは必ず第二版だつたと斷定すべき理由は無い。Neil の云ふ樣に Raymond が第二版で正統學派攻擊の態度を緩和してゐるとすれば、寧ろ吾々には第一版を參照する方が興味がある。況んや Raymond の主旨にして前後何等の變化なきのみならず、第二版について List との比較を試みてゐる Neil の引用中、別に特殊の言說をも見ることが出來ない上は、何れの版に從ふも異つた結果に到達することはない。私は既述の通り增井敎授所藏本 Thoughts on Political Economy. In two parts. By Daniel Raymond, Counsellor at Law. Baltimore; 1822. に依つた。一卷四百七十頁を紹介する餘裕がないので、第二部の重要でない各章は省略したし、猶ほ員數の都合で極めて抽象的な要點のみを摘出したに過ぎなかつたので、Raymond の興味ある行論の一端をも傳へ得ざりしを遺憾とする。別に Raymond の學說を紹介してゐるものに、Neil: op. cit. p. 28-38; Köhler: op. cit. p. 108-119. の二書がある。

(二) Raymond: op. cit. p. 233-4.

(三) Raymond は Smith, Malthus, Gamilh, Lauderdale, 等を屢々引用してゐる。J. B. Say. は飜譯がなかつたので第一版には注意せられず、第二版に於て始めて引用せられたが、勿論 Say の所說を知つてからも見解に變化を來す樣なことはなかつた。Neil は Ricard) も擧げてゐるが、之も初版には見えない。之等の內彼が最も厚い信賴をおいたのは Malthus の人口論であつたが、彼の根本概念に多少なりとも有益な暗示を與へたものは Laudedale 一人であつたと云つていゝ。Raymond は價値論を卻けてゐるとはいへ、富の概念に出發して國富增進の策に論及するまで Lauderdale の立論を想起せしめる個所は少くないのみならず、彼が每章學問上の用語の意義を明確にして一般に使用する場合と混同してはならぬと繰返してゐる如きも、Lauderdale の暗示を受けたのではないかとさへ思はれる。之等の外 Phisiocrate, Mercantilist 等の引用は Raymond 自身記してゐる樣に皆他の學者の引用したものを更に借用してゐるに過ぎない。Hirst は Sir James Steuart よりも Raymond は影響せられてゐると述べてゐるが、果して事實なるや否やを知らぬ。Hirst: op. cit. p. 112. Neil: op. cit. p. 39-45. 參照。

(四) 以上 Raymond の所說の紹介に當つては煩雜に亙るを慮つて頁付の摘記を省略した上に、各章の區別も無視した。第一部はすべて十一章、各章の題目を略記すれば、第一、序論。第二、國富とは何ぞや。第三、國富に關する諸學說の檢討。第四、勞働。第五、價値の標準。第六、國富の源泉と原因。第七、農工の比較。第八、農工比較に關する在來の諸說。第九、マアカンタイル・システム。第十、不生產的職業。第十一、私經濟及び奢侈。となる。

五

Thoughts on Political Economy. の第二部は序論を併せてすべて十二章、何れも政治經濟上の實際問題に對する政策論であるが(一)、私は Raymond と List の比較を本篇の目的とする故に、此の目的に重要な關係を有しない多くの章を紹介する餘裕を持たない。從つて茲に略述するのは獨占論と保護關稅論とに關する部分のみに止める。

自由主義の理論に從へば、獨占は特殊の國民の利益だけを特に偏重するの弊を釀すものとして、之を排除せんとするのであるが、實際上に於いては獨占は決して全廢せられてはしまはないのであつて、凡そ世界に諸國民が分立してゐる限り獨占も亦存續するのである。何となれば、一國民の政策はその國民全體の幸福を目標とすると同時に、他國民の利益を考慮する必要はないのであるから、或る貿易の獨占が有利なる場合、たとひ人類全體の爲にはその自由貿易を利とす可きにしても、此の國民はかゝる獨占を放棄する必要はないのである。此の場合 Raymond は獨占の意義を廣く解して一國民に就いて論じてゐるのであつて、國民の大多數の利益を犧牲としてその一小部分の者にの

み利益を保證する私的獨占は、勿論彼の喜ぶ所ではなかつた。而して國民の貿易上の獨占が有利であるか不利であるかといふ問題は、全く時期や周圍の事情に從つて異るが故に、一概に獨占を惡害として卻け去ることは誤りである。在來の經驗に從へば、或る種の產業を獨占し、外國品の輸入を制限せるが如き國民は、その結果國富を增進し幸福を增加するに至つたのであつた。Raymond はかゝる例を英國に求め、更に一國が通商條約を締結し、或は植民地を所有するは正に獨占に外ならずとなして Mathuen 條約の結果を考察し來る等、List の所論を彷彿せしめてゐるのである。

輸入稅が賦課せられる場合に、それが收入を擧げることを目的とする時と、國內取引若くは國民產業の上に於いて、自國の人民に外國民よりも大なる利益乃至特權を得せしめんとする時との二樣の別がある。依つて以て得らるべき收入の高と課稅の方法とに就いては異論があるものゝ、收入の爲めの輸入稅は總ての經濟學者が之を認めてゐるのであつて、論爭の中心となるのは右の內第二の場合に限られる。而も之、外國民を自國の商業乃至產業より、或は絕對的に、或は一定制限の下に排斥せんとするものであるから、課稅の輕重に從つて絕對的若くは限定的の差こそあれ、結局獨占を設定せんとするものに外ないのである。

實際上の關稅率の高低は、特殊の地方的事情に應じて異るものであるから Raymond は之を問題とせず、只之を決定する場合の原則を指摘せんとするものである『政治經濟上のあらゆる問題に於いては勿論、就中保護關稅の問題に於いては、公共の利益の方が個人の利益よりも高きに立つといふことを記憶せねばならぬ。公共の利便のためには私人の困窮乃至不便を忍ばなければならぬ。政治經濟學者が公私の利益の相反することを示した場合には、政府の干涉の必要なることを意味するのである。』『政治經濟上に於いては、國民は一體であり、立法部が支配者であるといふことが根本の原則とならねばならぬ。如何なる市民と雖も國民一般の安寧に反した利益に對する權利を持つことを許さるべきではない』。『市民は國民の安寧と一致する限りに於いて出來るだけ多くの自由を有すべきである。』何となれば一國民の勢力と能力とは、あらゆる市民をして各自の欲するが儘にその技術、勤勞、資本を使用せしめる場合に最も增進の速かなるべきが故である。かゝる考察に依つて Raymond の到達した結論は、『關稅乃至保護關稅に關するあらゆる問題は、便宜の問題たるべく、正義の問題たる可らず。』といふにある。

Adam Smith の自由主義は實に國民の利益と個人の利益とを區別しない謬說に過ぎないのであつて、自ら生產するよりも安價に購入することの出來る場合には、之を購買する方が有利であるといふ主張は個人に就いては當て嵌まるが、統一體としての國民に就いても常に適用せられるとは限らないのであつて、最も高價な場所で購入することが却つて利益な場合さへあるのである。即ち Smith の所論は猶ほ幾多の例外を看過してゐるのであつて、『斯かる例外が即ち保護關稅政策を生せしめるのである。』

更に Raymond は穀物條令に對する世論に反對しその勞働者に對して有利なることを說くと共に凡そ外國產業に對する制限法は皆有產者よりは勞働階級に有利なるものとした。又 Smith が一工業の創設の利害を測るに眼前の利益を以てするに讃せず、遠き將來に生ずべき利益を以てすべきこと

を說いてゐる場合にも Köhler の指摘してゐる樣に List の所說を思はしめるに足るものがある。かくて Smith の學說は偏狹短見の謗を免れず、國民に對しては勿論、個人に對してさへ甚だ危險なることを敎へるものとして斥けられた。

抑〻國富の源泉と原因とを明確に識別した以上、國富增殖の途はその原因を隆んならしむより外にないことは疑なく、而して之が最も有力なる手段は國民產業に賦與するに國內市場の獨占を以てするに如くはない。而も斯かる獨占はまた生產物に對する需要を確實ならしめるといふ重要な利益をも齎らす。加ふるにそは外國民の干涉束縛を蒙らざるが故に國民の獨立を保つ上にも欠く可からざるものである。國內市場の利益は未だ決して之のみに止まらず、その國民產業を進め國富を增す結果、國民をして一層勤勉の習慣を習はしめ、此の習慣はまた國富の一部分を構成するに至る。更にそは學藝技術の改良發達を促し、從つて國民が生活必需品を獲得するの能力を高めるのである。

猶ほ別の個所に於いて戰爭が國富の增進を致す場合があることを論じてゐる際にも Raymond と List との類似を認むべき節がないことはない。勿論 Raymond は戰爭を難ずべきものと稱し、その國富に有害なることを信ずるものではあるが、外國の侵犯避く可からざる場合我亦之に應じて鉾を取るに至るは免れ難い所であつて、此の際勞働の需要を增加し、產業を刺戟すれば、國民は之に依つて利益を受け、軍隊の消費は蓄積の弊を阻止し、人口の增加をさへ來すのである。故に戰爭は無用の消費をなすとの考は誤りであつて、只その弊害は、戰爭終結直後の動搖と、國富に對する破壞荒廢の程度に存するのみである、と說いてゐる。

Raymond の所說の大要は以上の如くである。

當時合衆國に於いては猶ほ未だ英國に對する反感が悉く冷却し去るに至つてはゐなかつたから、『米國の國民的、保護學說の最初の代表者 Daniel Raymond は、一部分英國に對する憎惡に刺戟せられてその學說を主張せるものである』(二)と云ふ學史家の解釋も、決して理由のないことでは無いが、彼は殊更ら Adam Smith に反對せんが爲に自說を揑造したのではなくて、彼が自ら考察の結果樹立した原理が、彼をして Smith に承服する能はざらしめたのであると云ふ Neil の所說(三)を寧ろ可とすべきではなからうか。Raymond の學說は、專ら彼の米國々狀に對する觀察に依つて生じたことは疑のない所であつて、殊にその第二部第二章平等論の一節を通讀するとき、之を今日の科學的見地より見れば寧ろ荒唐無稽に近き感も伴はぬではないが、合衆國建國の精神の著しく浮游するものあるを掬することが出來るのである。從つて彼の著 Thoughts on Political Economy. を合衆國が生んだ最初の政治經濟論と考へれば、吾人は之に對して限ない歷史的興味を覺えざるを得ないのである。

（一）第二部十二章の題名を略記する。第一、序論。第二、平等。第三、貧困。第四、國民產業の刺戟。戰爭及び公費の支出。第五、銀行。第六、機械。第七、獨占及び植民政策。第八、保護關稅。第九、國債。第十、會社。第十一、奴隸。第十二、結論。

（二）Cossa: op. cit. p. 468.

Fürber: Geschichte und kritische Studien zur Entwicklung der Oekonomischen Theorien in Amerika. p. 58.

（三）Neil: op. cit. p. 39.

六

私は今茲に Raymond と List の所論を一々擧げて來て、その異同を辨じてゐる餘白を持たないし、よしその相異を指摘することが出來ても、行論の粗密に依つて一の他に及ぼす暗示の大小を決することは出來ない。のみならず兩者類似の見解を披瀝してゐる場合でも、政府干渉の必要を論じ若くは國內市場の優越を說くが如きは、必ずしも Raymond を俟つまでも無く Hamilton を始め當時の保護論者が一般に口にして居つたことであるから、List に影響を及ぼした者として只 Raymond のみを指すことは不可能である。故に茲にはこれ等の末節に對する考察に多言を費すことを差控える。そこで List と Raymond の交涉を主張するに最も有力な論據は何處にありやといふに、私は之を國民性及び生產力の重視に歸せしめることが出來ると考へる。更に之を嚮に紹介した學史家の研究に就いて見るならば Köhler の所說を以て此の關係を主張する上に最も强固な論據を把握せるものと稱すべきである。從つて私は茲に彼の論據を檢討すべき必要に迫られるのである。

先づ Köhler が Raymond の根本思想として、國民經濟と個人經濟とを區別し、國民と個人とを區別して輕濟的統一たる國民の觀念を主張せるを擧げ、而も斯かる國民の統一の說は Raymond に依つて始めて政治經濟上に主張せらるゝに至つた、と稱するは如何。成る程 Raymond は個人經濟と國民經濟の區別せらるべきことを主張してはゐるが、List が個人經濟及び世界經濟に對して國民經濟を對立せしむべき必要を以て、彼の經濟學說の出發點としてゐるに反し、Raymond は先づ國富と個人の富とを區別せんとするに發して、國民經濟と個人經濟とはかゝる富の觀念に依つて別たるべきものとなし、國民經濟そのものゝ地位に對する考へは甚だ漠然としてゐる。彼の所說が斯く富の觀念の上に基いてゐる點に於いて、吾々は彼が Lauderdale の立論に猶ほ甚だ牽制せられてゐたと解すべき餘地をも認めることが出來るのである。只その背後に存した國民の統一の觀念に至つては、Köhler も認めてゐる樣に往々にして Raymond の所言の方が明確な徹底した感じをさへ與へるのであるが、惟ふに之は彼が殆ど每章自己の主張を述べ在來の學說を難ずるに際して、一々國民の一體として見るべきことを、國富と個人の富との差別と共に述べてゐる爲であつて、彼が終始一貫此の信念を棄てなかつたことは事實であらうが、國民の觀念そのものに對する所說に至つては如何なる深さを有してゐたかを示すものではない。Köhler が List は Raymond の漠然たる暗示をとり入れて巧みに種々の原理學說に造り上げたと云ふのならば、吾人は敢て List の國民性なる語が必ずしも Raymond の所言に基いたものでないとは斷言しないけれども、Raymond が國民の統一を論じてゐるのは政治經濟學上實に嚆矢であるといふ Köhler の所說は、輕卒といふよりは寧ろ考へ過ぎた謬說と云はねばならぬのである、何となれば世界人類と個人との中間に國民を認めようとする List の主張は、Raymond の只管國民の一體なることのみを主張する簡單な所說にその先蹤を有するのみに止まらず、Adam Müller を始め獨逸浪漫派の思想に旣に顯はれてゐるのであつて、その List に對する關係は Raymond と List との交涉を窮めるよりも遙かに容易に觀察することが出來るのである。之に對して Köhler は List が獨逸關稅同盟當時に懷いてゐた國民主義の思想と Raymond の所論を受け容れて主張するに至つた後の國民の經濟的統一に關する觀念とは全然別ものあると稱する

が、私は此の見解に對して容易に讃成することは出來ないのである。たとひ List と浪漫派との間に相異があるにしても、List が Raymond の所說を取つて之に獨自の原理を附與したと信ずると同樣に、浪漫派の思想を基礎として自說を展開したとも信ずることが出來ないであらうか。

次に生產力の重視に關して Köhler は List と Raymond との關係を主張するのであるが、其の動かす可からざる論據といふのは、生產力の觀念を唱へた點に於いても矢張り Raymond がその『嚆矢』であつた、といふに歸着する。寔に Köhler が多數の頁に亘つて讀み惡い獨文を弄して反覆縷述してゐる List と Raymond との交涉は、彼の學說の唯一の先蹤を此にありとなす簡單な論據を紛飾してゐるに過ぎない。而も斯かる根底は不幸にして健全なものではなかつた。Raymond は決して國民性の所說に於いても生產力の理論に於いても、經濟學史上その嚆矢たるの名譽を擔ふものではなかつた。而して Köhler こそ經濟學史家としてかゝる謬說を懷く不名譽な嚆矢であり、又恐らくはその最後でもあらう。『生活必需品及び享樂品を獲得する能力』と、その依て發せる國民の富に對する Raymond の見解と、價値の觀念を中心とする物質主義を卻けて『生產力』を重んずる List の抽象的『力』の主張との相異を記述するまでもなく、そして又 List 以前の生產力說に關する學史的考究は別の機會に讓るにしても、List の生產力說と共に Adam Müller に同樣の思想の存せしことは、何人も容易に聯想することが出來るであらう。Köhler は彼以前の學者が List を論ずる場合に、彼の公開狀に通せず Raymond の著書を知らざりしことを其の欠陷として攻擊してゐるが、吾人は彼が果してよく經濟學史に通せしや否やを疑問とするのである。のみならず彼が Hamilton の所論を檢するに際して、自らその報告書の原文を通讀せずして Harrower の紹介に依賴するが如き不眞面目な態度に出でて、己を責むるに緩なるを見れば、彼が Adam Müller を通讀しなかつた位は敢て不思議とするに足らぬのであつて、恐らく Köhler は List と Raymond の二者の原著だけしか知らず、殊に從前餘り注目せられなかつた List の公開狀と Raymond の經濟學とに幻惑せられて、兩者の類似の指摘のみに熱中し、遂に偏頗な謬見を揑造し誇張するに至つたものであらうと思はれるのである。而もその手際は甚だ巧妙なものではなかつた。吾人をして Köhler に與せしめれば、更に有力な理由として Nationale System を一貫せる List の歷史的研究方法がその公開狀の內には未だ全く顯れず Raymond が往々暗示してゐる樣に、不適當な學理よりは經驗に基く觀察の優れたることを高唱してゐるに過ぎないことや、例證、言說の末に示された興味ある類似の一二やを數へることさへ出來るのである。然しながら斯くの如きは勿論二者の交涉を證明するに足るものではない。何となれば List こそ經驗の重視に依つて實證的研究方法に導かれたとはいへ Raymond は之に對して大なる信賴を置かざりしのみならず、彼の研究のそも〳〵の本源は、額に汗して食を得べし、といふ神聖なる自然の法則に存し、或は他を侵すも相互に掠奪することなからんとする社會契約の法則より演繹せられてゐるに過ぎないからである。

最後に最も重要な問題は List の新しい見解は渡米以前には未だ彼の著述の內に顯はれてゐなかつたといふことであつて、これは勿論 Raymond の場合にのみ問題となることではないが Raymond の影響を主張する上に欠く可からざる支柱となる所論である。簡單ではあるが、之に對する解答は

上述の Köhler に對する私見の内に少しく觸れておいた以上を茲に記す暇はない。事實 List は渡米以前に於いては大いに自由貿易の必要を力説したことがあつたが、果してそれが如何なる見地に立脚したものであつたか。此の間の事情に關しては、猶ほ幾多の資料の蒐集と鋭利周到なる研究を必要とする。幸にして他日私が若しかゝる研究の一端に多少の確信ある結果を得ることが出來れば、既に發表した私見の完成のためにも、廣く公表して嚴正なる批判を仰がんとするに吝なるものではない。

私が本論に於いて明かにしようと試みたことは List は如何なる程度まで Raymond の影響の下に立つてゐるかといふ問題である。そして私の結論は、Raymond 唯一個の思想が List の學説の淵源であつたと解する數名の學史家の所説を斷然斥け去るに至つた。米國滯留中を通じて彼に最も大なる教訓を與へたものは、米國の實社會であつた。その内には喧しい自由對保護の論爭が行はれてゐた。保護主義者の所論の多種多様なる中に Raymond にその論據を求めることを便宜とした論者があつた。實に List に取つては Raymond のみが特に記憶せられねばならぬ論者ではなかつたのである。List は決して Raymond の所説に留まつてはゐなかつた。Raymond の所説は、米國の生んだ最初の經濟論であるといふことに最も大きな意義を持つ。List の經濟論は、米國に依つて大なる教訓を與へられたけれども、之をひとり米國のみの所産と考へることは許されない。寔に彼は米國の教訓を受け容れ入れるだけの準備を有つて新大陸に臨んだのである。若し夫れ彼の大著 Nationale System に至つては、彼が半生の經歷より生み出されたものであつて、その背景をなすものは、ひとり米國に止まらず、獨逸は云ふも更なり、英佛を始め歐洲諸國が存したのである。かくて各國民の特異性に重きを置く彼の相對的歴史主義は、同時に世界の諸國民に妥當すべき原理を樹立せんとする普遍主義と併立せしめられたのであつた。

終りに拙稿の發表毎に手稿の閲讀を賜り行文用語の末に至るまで細密な注意を寄せられた三邊教授の高恩に謝意を捧げる。夫にも係らず猶ほ幾多不備の點を止めたことは、元より筆者の蒙昧の至す所、教授並びに讀者に負ふ罪や大である。所論の内容に就いても責は悉く筆者に存する。殊に都合上記述に洩れたことや、十分筆者の意を傳へ得なかつたことも少くないが、適當な機會に補足したい意圖あることを記して大方の寛恕を希ふものである。